

会員紹介：甲斐 信好さん

私の略歴



拓殖大学国際学部教授。1958年（昭和33年）福岡県北九州市生まれ。一橋大学社会学部卒業・東京工業大学大学院社会理工学研究科修了（学術博士 Ph.D.）。専門は国際政治。松下政経塾3期生。財団法人松下政経塾研修主担当・京都政経塾塾頭などを経て2000年より拓殖大学へ。2008年より現職。東南アジア研究所（シンガポール）客員研究員、コンケン大学客員教授（タイ）など歴任。

松下政経塾時代：大来先生との出会い

私は大学では国際政治を専攻し、卒業後1982年（昭和57年）に松下政経塾に進みました。当時は、「経営の神様」と言われた松下幸之助さんをご存命で、直接指導いただくという（今から考えると）信じられないくらい素晴らしい機会に恵まれました。

その松下政経塾の役員に、SRIDの創設者である大来佐武郎先生がいらっしゃいました。政経塾同期の本間正人くんが大来先生の秘書をしていたこともあり、大来先生から推薦状をいただいて1986年から87年にかけてタイ王国のタマサート大学日本研究センターに研究員として留学をしました。東南アジアの政治について勉強したいというのが理由でした。タイとのお付き合いは今に至るまで続くことになります。



タイの結婚式で

私が勤務する拓殖大学の卒業生（新郎）と客員教授を務めていたコンケン大学の卒業生（新婦）の結婚式です。タイ・ラオス国境の町ノンカイで

SRID 入会

SRID 入会のきっかけはよく覚えていないのですが、上記のようなプロセスのどこかで入れていただいたのだと思います。1988年夏に御殿場で行われた夏季合宿・シンポジウムの記録が残っていますから、SRID 歴は少なくとも28年（あるいはそれ以上）になります。

SRID は、大来先生を中心に文字通り日本の国際開発を背負っている方々がキラ星のごとく集っている場です。議論もハイレベルで、とても若造の私が口を挟めるような雰囲気

はありません。システムはまだありませんでしたが、今だったら「学生会員」でしょう。一度意を決し意見を述べたら、メンバーの方からジロツと睨まれて、「レベル低いな」といわれて退散した思い出があります(笑)。それ以来いつも「ここに居ていいのかな」と(笑)。

従事した仕事の内容

政策スタッフ時代：立法の話、再び松下政経塾へ

1987年(昭和62年)に松下政経塾を卒塾してFFS(自由主義経済推進機構、のちにFLS:自由社会フォーラム)研究員となりました。これは浜田卓二郎先生など当時の自民党若手国会議員が集ったシンクタンクです。今ならば「政策秘書」、政策スタッフの集団といったほうがわかりやすいかもしれません。私はその中で外交政策を担当していました。

仕事は政治家から出されてきたテーマに対するレポートや国会答弁の作成などです。国会中継などで総理や担当大臣と質問者とのやり取りがありますね。実は大臣側の答弁は官僚(たとえば外務大臣だと外務省)、質問者側の原稿は私たちのようなスタッフが書きます。与党の場合はいわゆるヤラセが多いのですが、手違いで安倍晋太郎外務大臣(安倍晋三現総理のお父さん)との質疑がうまくいかず、こっぴどく叱られたこともありました。

当時、ODAは主として四省庁体制で決定されていました。四省庁とは、外務省、大蔵省、通産省、経済企画庁(いずれも名称は当時)です。省庁の利害対立によってODAの方針が定まらないことも、時にはありました。自民党若手議員として省庁を超えた「国際協力法」を提出しようという話になり、それに携わることとなりました。

国際協力法を議員立法で提出しよう、という動きが伝わったとたん、ある省庁のトップ(事務次官)が来られて、「大変結構なことかと思えます。については、主務官庁はぜひ●●省に」と代議士に陳情?されたのは懐かしい思い出です。

この当時だったと思いますが、SRIDメンバー全体でタイを訪れる機会がありました。現地で見えた国際協力の現場も面白かったのですが、そこに集った百戦錬磨の方々から伺うODAの世界に目が拓かれた思いがしたのを憶えています。リアルな政治の世界と国際開発との接点をどのように落とし込むのか、自分なりに考えて提言にもまとめました。

その後、松下政経塾に今度はスタッフとして戻ることになりました。私に関わるようになってまもなく、松下幸之助さんが亡くなりました。1989年(平成元年)4月のことです。創設者を失い、松下政経塾にとって動乱の時期、「文化大革命」の時期がやってきて翻弄されました。

再び政治の動きに巻き込まれることになりました。政経塾の役員に熊本県知事(当時)の細川護熙さんがいました。細川さんは1992年に日本新党を立ち上げました。当時は自民党一党体制(今もそうですが…(笑))。「日本新党、すばらしい!」と口でいう人はいても、実際に立ち上げになると政治的行動を共にする人は少ない。そこで政経塾の塾生が活躍することになりました。のちに民主党で総理となる野田佳彦さんら多数の松下政経塾出身者

が日本新党や新党さきがけに加わりました。

大学院へ：渡辺利夫先生門下に

政経塾はどうあるべきか、侃々諤々の議論とともに、財団法人を辞めて「新党」とすべきだ、という話も出てきました。政経塾の内部もわかれ、派閥争いにも巻き込まれて私は心身ともに疲弊することになりました。混乱の中で私は自分に問いました。「お前は、本当は何をやりたいかったのか」。答えは、「大学の教壇に立ちたい」でした。そのためには学位が必要です。1996年（平成8年）、東京工業大学に新しくできた文理融合の大学院・社会理工学研究科に入学、37歳で大学院生になりました。学割を使ってJRに乗っていると車掌さんから学生証の提示を求められました(笑)。無理のない話です。

論文指導は渡辺利夫先生、アジア経済・開発経済学の第一人者です。実は、最初の渡辺先生とのご縁は大来先生の紹介でした。先に述べたFFSの外交政策タスクフォースの座長として大来先生が推薦されて以来のお付き合いですから、もう30年以上になります。

博士論文のテーマを相談しているうちに渡辺先生から「開発途上国における経済発展と政治的民主化を研究したらどうか」と言われました。どのような経済的条件や開発の結果が政治的民主化に結びつくか、というテーマです。最初はピンとこなかったのですが、やってみると奥が深くて面白い。国際開発と政治の接点という私の専門がこの時決まりました。大蔵省（当時）の開発経済学研究者派遣として、「開発と民主化」をテーマにシンガポール国立東南アジア研究所（ISEAS：Institute of South East Asia）に派遣されるという機会もいただきました。

拓殖大学国際開発学部へ：大津司郎さんとアフリカとの出会い

博士論文を執筆しているある日、渡辺先生が「今度、拓殖大学に新しい学部をつくるのだけれど来ないかい？」と誘われました。こんなありがたい話はありません。「もちろんです」と二つ返事でお願ひしました。

拓殖大学国際開発学部（現在は国際学部）は、渡辺先生が文字通り創設者として2000年（平成12年）に開設したものです。高尾に新設されたキャンパスで学生たちと過ごす日々が始まりました。学生の2割は留学生です。その留学生たちと、SRIDの三上さんのご自宅に招いていただき、定期的に「留学生の会」を開催したことも思い出します。

ある日ケニアからの留学生が、「一度、僕の保証人の話を聞いてくれませんか」と言います。それがアフリカ・ジャーナリストの大津司郎さんとの出会いでした。東京農大時代からアフリカに渡り、青年海外協力隊員としてタンザニアへ、その後ソマリアやルワンダなど紛争取材を重ね、アフリカ渡航歴は180回を超えるツワモノのジャーナリストです。私のゼミで話をしてもらったのですが、まさに目から鱗の連続。最後に彼から「アフリカを知らなければ、国際政治はわかりませんよ」と言われ、思わず応えていました。「じゃ、大津さん、アフリカに連れて行ってよ」。

それから大津さんを案内人として、学生とアフリカに出かけることとなりました。タンザニア、ケニア、ルワンダ、コンゴ民主共和国…アフリカスタディツアーも 12 年目になります。目的は「国際政治の最前線を知ること」。難民、貧困、紛争、虐殺、感染症…アフリカでは、日本で知ることのできない国際社会の現実を目の当たりにしています。



ルワンダの小学校で

コンゴ民主共和国との国境に近いルワンダの村で、小学校の子供たちと遊ぶ私の学生たちです

仕事上の苦勞と喜び：人生を変えるアフリカ、そして今

大半の家庭に水道のないサブサハラ・アフリカの国では、井戸まで水を汲みに行くのは子供か女性たちの仕事。就学率の向上を邪魔する大きな要因は児童労働です。大人の私たちにも重たいポリタンクを抱えて、時には何キロもの道を出かけているのを見ると胸が痛みます。

私のゼミ生だった N さんは、浪人した上、第一志望に落ちて私の大学に入ってきました。1 年生のときからずっと「私はこんな大学に来るはずじゃなかった。第一志望に合格していれば…」と思い続けてきたそうです。

難民キャンプでの体験や、ポリタンクを抱えて井戸まで長い道のりを歩く子供たちの姿を見て、自分の中の何かが変わったらしい。日本に帰って来たとき、ふと「アタシ、なんてアホなことを考えているんだろう」と思ったそうです。

N さんはいま掘削会社に勤め、日本の援助でアフリカの村に井戸を掘る仕事をしています。そして「先生、これが私の天職よ。いい大学に行きました」と言い切ります。心の底で「よく言うわ」と思いながら私も苦笑。

アフリカは確かに悲惨なことがたくさんあります。目を覆いたくなる事実を突きつけられることも。暗さの中でこそ一筋の光が強調されるように、だからこそ人間のすばらしさやつながりの尊さに胸を打たれることもあります。



ケニアとタンザニアの国境で

後ろにある石にテープで「T」と「K」と貼ってある。これが「国境」(笑)。キリンにもシマウマにも国境線は関係ありません。左の女性は SRID 学生部だった T さん

権力欲や醜さをまざまざと見せつけられる政治の世界から大学に行ったせいでしょうか、仕事の「苦勞」を感じたことはほとんどありません(笑)。教員になって最初の卒業式の時、「ありがとうございました」、「先生のお陰です」とたくさんの学生やご両親が時には涙を流して来てくださるのにびっくり。「何にもしていないのに」と戸惑いを隠すのに必死でした。人生の一番美しい時期の人たちと出会える大学の教員とは、なんとありがたい仕事だろうと思っています。目の前の学生を大切に思えなくなった時は辞める時、と決めています。

考えてみると、私自身もまた大来先生はじめ多くの方々との出会いで生かされてきたことを痛感します。自分のゼミの学生には、よく「T字型人間」になりなさいと申します。幅広い教養と深い専門を持った人間になることが大事だよと。T字型人間は自分の創作だとすっかり思い込んでいたのですが、2014年11月の大来先生を偲ぶ会の時に、大来先生の造語であることを知り、連れて行った学生にも「甲斐先生のオリジナルじゃないんだ」と笑われました。恥ずかしながら、しっかり自分の中で内面化されていたようです。

私の生き方：「現実政治」と「国際開発」の接点で

国際政治の理論で大きな柱となる考え方に「リアリズム」(現実主義)と「リベラリズム」(理想的協調主義)の2つがあります。私は講義で「人間の悪をしっかりと見据える」のがリアリズム、「人間の善なるものを信じる」のがリベラリズムだと説明しています。人間の中には利己的と利他的なものが両方存在しています。リアリズムとリベラリズムは、どちらも真実でありどちらも大事です。

ただし、政治の基本はリアリズムだと考えます。なぜならば、「悪を知らない善は弱い」からです。人間の暗い面に眼を向ける勇気のない理想は脆いのです(と、自戒の念をこめて断言します)。レイモンド・チャンドラーの小説に出てくる私立探偵・フィリップ・マローウはこうつぶやきます。「タフでなければ生きていけない。やさしくなければ生きている価値がない」(If I wasn't hard, I wouldn't be alive. If I couldn't ever be gentle, I wouldn't deserve to be alive)。

利己的であることは生きていく上で必要です。しかし人間はそれだけでは幸せになれない。他人を幸せにする人が自分も幸せになる、というのも真実です。アフリカはそのことを学ばせてくれました。リアリズムとリベラリズム、その両方を持ち合わせた「複眼思考」が必要なのです。前述の偲ぶ会の席で、大来佐武郎先生はまさしく「複眼思考の人」であったことを改めて理解することができました。私もそうでありたい。

「私が SRID に居てもいいのかな？」といつも思いつつ 30 年近くが経ちました。一方の手に「現実政治」、もう一方に「国際開発」を持ちながらその接点で生きて来られたのは、本当に有難いことです。大来先生、松下幸之助さん、渡辺利夫先生、大津司郎さんをはじめ多くの方に心から感謝を申し上げて、長い自己紹介を終えたいと思います。ありがとうございました。